

ごした時間の方が長いという事実、政府は直面しています。リベリアの国民全体の35%、女性では44%が、がこれまで一度も就学したことがないのです。また、子ども・若者の非識字率は68%と高く、男女別では、男性の55%、女性の81%が非識字者です。

我々政府はこれに対して、まず公立の初等学校の授業料や費用を免除し、さらに公立中等学校の授業料・費用を大幅に減額しました。その結果、2年間で就学率が44%上昇し、83万人の子どもが就学できるようになり、そのほとんどは女子でした。また学校の再建、授業の再開も全国的に進めています。5歳未満の95%以上の乳幼児が予防接種を受けられるようにもなりました。レイブには終身刑をもって処すという厳しい法律も可決されました。国民、特に女性に対してHIV／AIDSの予防策やケアも提供されるようになりました。

そして、初等レベルと並行して行われる加速学習プログラムという介入プログラムが実施されたことによって、初等教育を受けられなかった若者、青年の基礎教育ニーズに応えることができました。

教育への政府の取り組みに加えて、女子教育・女性の識字率向上を支援するための民間資金が導入されました。我々はリベリア教育信託(Liberia Education Trust)といわれるトラストを設立し、「50・500・5000プログラム」と呼ばれる、「50の学校を再建し、500人の教員を訓練し、5000人の女子に奨学金を提供する」ことを目指す事業を実施しました。これは4年のプログラムの2年目で、200万ドル以上の資金が動員され、目標の3分の1以上が達成されました。さらに、1万人以上の市場の女性たちの識字率向上を目指す取り組みも加えて発達させました。

教育は、我々政府の第一の目標であり、それはアフリカ大陸全土で一貫して優先課題とされています。教育ある国民なくして私たちの開発目標を達成することができないことは非常に明ら

かです。今日、私たちアフリカ大陸のほとんどの諸国において、享受している開発のレベルと、これまで国民に施してきた教育のレベルとの間に顕著な相関関係が存在しているのです。だからこそ私たちは、予算に占める教育費の割合を、最高レベルにしたいと努力しています。

締めくくりに当たりまして、UNICEF（国連児童基金）事務総長の言葉を引用します。UNICEFは、リベリアのみならずアフリカ全土で教育プログラムの支援をしています。UNICEFの事務総長いわく、『女子教育のもたらす多大な恩恵はもはや疑う余地はありません。教育によって母子の死亡率を低減させ、健康、栄養状態を向上させることができ、特に女子の場合は虐待、搾取、HIV／AIDSから守ることができます。また、最も意味のある形でジェンダーの平等にも寄与するのです。』

副大臣、そして日本政府に一言申し上げます。日本では初等教育に非常に力を入れており、アフリカにおける教育への二国間支援にも力を入れていることをうれしく思います。引き続き支援を受けて、アフリカが私たちの目標を達成し、将来の基盤を構築することができるよう協力していただくと確信しています。そうすることで、依存から自立へ、援助から貿易へと向かい、私たちが自立することができるかと確信します。From Aid to Tradeの実現です。

これがアフリカ諸国すべての基本目標です。教育分野における日本政府の支援により、私たちが今の成長によって貧困を絶ち、アフリカを世界における競争力のある地域に成長させ、天然資源を存続させることができると確信しています。また、成長と開発の総合目標を達成するために必要なのは教育を受けた国民であると確信しています。

ご招待並びにご清聴に感謝いたします。

「アフリカにおける健康と女子教育」

喜多 悦子氏（日本赤十字九州国際看護大学学長、国際協力銀行顧問）

第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)の開催に先立つ、本日のこのシンポジウムにお招きいただき、たいへん光栄に存じます。本日の講演を、私の経歴を少しなぞることから始めたいと思います。



60年と少し前、私自身が小児科医の患者であった時代です。写真に写っているのが私ですが、その頃の日本の健康指数はあまり良くありませんでした。たくさんの子供が亡くなっています。妊産婦死亡もたいへん多かった時代です。私の母は、現在、健在とは申せませんが、95歳です。母は4年制の大学を出ています。こういう母の教育歴が私や姉、弟の教育に関係していたと思います。先ほど大統領閣下がおっしゃっ

た Educated Parents ということは大事なことだと思います。

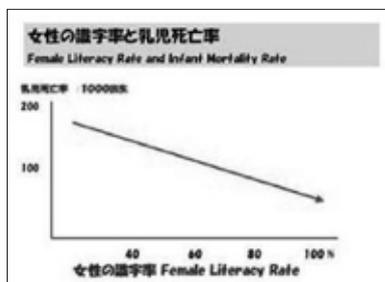
次に、20年飛びまして、私が小児科医になったころです。日本は東京オリンピックが終わって数年といった時代ですが、健康指数は随分改善しています。これはちょっと分かりにくいですが、はしか(Measles)です。Neonatal Tetanus（新生児破傷風）です。こういう病気が日本にはまだ見られていた時代です。しかし、全体としてかなり良くなりました。

これはなぜでしょうか。後になって考えたことですが、まず戦争に敗れたということきっかけに、伝統的な社会がかなり変わったということがあると思います。押し付けられた憲法という意見もありますが、それまでの古い価値観が変わった、特に女性に対する考え方が変わったということがあるかと思っています。そ

して、近隣の戦争による効果もあったかもしれませんが、戦後の復興と経済発展が連携したこと、そして、どちらかという日本の場合はトップダウンではありましたが、保健医療制度の改革が進んだということもあります。そして先ほどスライドにも出ていましたが、女性の識字率は以前から高く、戦後の時代において、中学校、高等学校に行く女子の数が増えたということが原因ではないかと思えます。私自身も田舎に生まれましたが、両親のサポートの下、医学部に進めたのはこういう時代であったからだと思います。もう一つ私が思うのは、日本が紛争に巻き込まれなかったということたいへん大きな要素だと、たくさんの紛争地の仕事をするにつけ思う次第です。

それからまた20年飛びます。私が二十数年前、国際分野の仕事に就いたころです。それまで先進国型の病院の医療に携わっていたところから、砂漠型ともいべき大きく違った医療環境の下で、何もなかったところでの保健医療を進めるという新たな仕事で、たくさんの経験と失敗をしました。

これは、パキスタンに滞留していたアフガン難民のお母さんたちに離乳食の指導をしているところですが、うまくいきませんでした。これは難民の子どもたちが炎天下に水を待っているところです。そのころ、町で見たポスターですが、途上国の女性の置かれている状況を実によく物語っていると思います。



その中で、先ほど大統領閣下が述べられたことですが、実は衝撃を受けた一つのグラフがあります。女性の識字率と子どもの死亡率や、健康がもろに関係しています。女性の識字率が上がれば、子どもが死ななくなるということです。

今から考えると当たり前のことであり、何の不思議もないわけですが、当時、私は目からうろこが落ちる気持ちになりました。その後、たくさんの国々の保健医療に関与させていただきました。特に紛争地の仕事が多かったのですが、本当に信じられないような事態に遭遇することがたくさんありました。

これは今のコンゴ民主共和国(旧ザイール)の地方の大きな病院です。働いている人は懸命なのですが、ぱっと見たときには、病院なのにまるで倉庫のように見えるようなところでした。当時、1000人の子どもが生まれて5歳まで320人が死ぬという状態、あるいは10万の出産が起こる間に1800人の女性が亡くなるということで、これは最悪の数字でしたが、いずれもアフリカの国でした。

これはウガンダでヘビにかまれた少年の写真です。何の変哲もないようですが、手に添えてあるものは、日本ですとステンレスのきれいな道具ですが、この少年の手に巻かれていたものは実はダンボールの切れ端です。日本の医療費削減もこのようにやれば安くなるのかなと思いましたが、そんなこともありました。

この写真は1990年代の真ん中にルワンダで大きな紛争があっ

た後、訪れた村です。男性のほとんど全員が殺されたとのことで、女性だけが残っている村というのは、やはり人が住んでいく社会としては非常にいびつな感じを受けました。

そのような中で、少し退屈な表ですが、私が思ったことです。

これは世界のお金持ちの国11カ国と、貧しい国11カ国の数字の比較をしたものです。人は誰も生まれる場所や時を選べません。にもかかわらず、どこに生まれたかで非常に大きな差を押し付けられているわけです。お金持ち度でいえば213倍、子どもの死ぬ数でいえば41倍、赤ちゃんの死ぬ数でいえば27倍、そして妊産婦死亡、女性が妊娠や分娩で死ぬ数でいえば126倍の大きな差があります。なぜこんなことが起こっているのか。いろいろな問題がありますが、私の中でたいへん気になることは、大人の識字率が非常に違うということもありますが、女子と男子の識字率の差、特に中学に行くあたりの差がまだまだ非常に大きい。初等教育、中等教育の重要性ということで、これはみんなが力を合わせれば何とかかなりそうなことではないかという気がします。この時、整理した貧しい11カ国の中にリベリアは入っていませんが、タジキスタンを除いて残りはアフリカの国です。一方、お金持ちの国は日本を除いて、アメリカとヨーロッパの国です。

このような中で、私は最初、母親の知識というものがとても重要だということにはすぐ気がきましたが、そこで母親に誰がいつ、どのように知識を伝えているのかということについて考えた時代があります。これは受け身の教育だと思います。しかし、やがて母親の予備軍となる女性、女の子がどのように能動的に知識を獲得できるのか。女性が、女の子が積極的に教育を受ける形が必要だと思いました。

私の友人のタンザニア人のドクターがおっしゃるのは、自分が医者になったために、自分のお姉さんと妹は学校に行けなかった、そのことを自分はたいへん罪深く思っていると。そして自分は今、3人の子どもがいる。1人は男の子で、2人は女の子だけれども、2人の女の子にも同じように教育を与えたいと彼は言っています。そのことについて、私は本当にそうあってほしいと思っています。

先ほど、私が1980年代の終わりに衝撃を受けたというグラフですが、この図は非常に新しいデータで、やはり女性が教育を受けると子どもが死ななくなるという実態はまだ変わっていないわけです。このことについて、みんなが力を合わせて何とかしなければいけないと思っています。

そこで、再び日本に戻らせていただきます。私の経歴よりはるかに古い江戸時代には、日本の子育ての中では不都合なこともありました。寺子屋や私塾という庶民が勉強する場があったそうです。江戸だけで1500ぐらいあったといわれていますが、調べてみると、女の子ばかりの寺子屋があったということも記録に残っています。

そして育児書も、たくさんといってもいいと思いますが、出版されています。これは日本で一番古い育児書といわれている『小児必用記』、あるいは『小児必用養育草(そだてくさ)』、これ

は実は私が現在勤務している福岡県で生まれたそうです。つまり17～18世紀にかけて、既にそのような育児書があった。育児書は誰が読むのかということです。そのころ、元禄時代には井原西鶴や近松門左衛門という、今でいえば流行作家がいました。高校の古文などを思い返すと、彼らの文章、特に西鶴の文章はたいへん難しいといわれています。しかし、それを理解する庶民や女性がたくさんいたから、こういう本が売れたのではないかと思います。つまり、読み書きのできる町人文化、シビルソサエティー（市民社会）というものが江戸時代にあったということが、日本が第二次世界大戦後に比較的素早く復興できたことの原因ではないかと思います。

そのことに関して、先ほど大統領閣下もお話しになった妊産婦死亡のことについて、古いところを調べてみると、『日本産科叢書』というお産をまとめた本が江戸時代に出ています。明治時代にまとめられたそうですが、江戸時代には59のお産にかかわる本があったということが、これを見るとわかります。この原本になるものは京都大学に置いてあるそうですが、中を見ると、このように浮世絵風の、非常に芸術的といってもいいかもしれませんが、こういう絵もあったり、産湯を使わせているところや、お母さんの母乳のこの凄まじい絵というのは、実に女性のたくまじさを物語っているものではないかと思います。

それから、新しく出版された教科書の方を見ていただくと、ちょっと分かりにくいかもしれませんが、お坊さんの格好をした男性がお産にかかわっている絵が残っています。こういうことからすると、子育て、お産ということに対する民間の意識は相当高かったのではないかと私自身は思っています。女性の健康ということを考えて、やはり社会全体が変わっていかないと目的はなかなか達せられないのではないかと思います。

さて、健康ということを考えてみますと、健康を冒すものは、私ども医師や看護職というのは、ウイルスやばい菌やけがということを考えますが、決してそれだけではありません。食料、栄養の問題、水、住居、政治、経済、文化、そして紛争、環境破壊といったものがいろいろと絡んでいます。しかし、もし人々に教育や知識があれば、さまざまな苦難に対して、さまざまな問題に対して解決する方法を工夫することができると私は信じています。これらは教育の力だと思っています。

さて、日本は今年、『源氏物語』の千年紀です。『源氏物語』は日本最古の物語、ロマンス、恋愛小説であり、不倫小説という人もいます。ただし、紫式部の本名が分からなかったというのは、やはりジェンダーの問題があるわけです。古いということからすると、例えばギリシャ時代に女性詩人のサッフォーがいたというように、古いものは幾らでもあります。『源氏物語』に関しては、実に多数の解釈、通釈が1000年にわたって続いているわけです。このようなことからすると、やはり面白い、楽しい読み物が人々の教育を促進する材料になるのではないかと思います。

本日はリベリア大統領閣下がご臨席なので、私は僭越ながら、アフリカの開発、女子の教育について五つの提言をさせていた

だきたいと思います。まずは教育に関して、堅苦しくなく、面白い物語を取り入れてほしいと思います。『源氏物語』のようなラブストーリーでもいいと思います。それから、子どもたちにはボードレスのファンタジーがいいのではないかと思います。私のお薦めは、こういうところで名前を出していいのか悪いのか分かりませんが、「となりのトトロ」です。これはアフリカの方、あるいはヨーロッパの方と一緒に英語版のトトロを見たときに、皆さんが本当に等しく感動なさいました。これはぜひ子どもたちに見せていただきたいものだと思います。あとの三つは少し堅苦しいのですが、基礎教育における健康教育です。先ほど大統領がおっしゃいましたが、健康教育を小学校、中学校でやるということはとても有効なことだと思います。それから、そのためにアフリカの女性教員をわが国に招請して日本の状態を見ていただきたいと思います。それから、女性の教員をできるだけたくさん登用していただくこと、この五つを提言したいと思います。

これは私がアフリカでお目にかかったたくさんのお母さま方の数枚の写真です。未来を背負う子どもたちを育てる。それは必ずしも女性の仕事ではありませんが、各所で献身的に、本当に困難な中で子どもを育てておられるお母さま方をたくさん見ました。そのお母さん、アフリカの女性、子どもたちがたくさんのお母さんを持つようになってほしいと思っています。私はそもそも医師として国際保健の分野に入りました。人の幸福、Well beingということを考えたとき、教育の力というものがとても重要だと思いました。

これはケニアのある大きなスラムの中の、両親をAIDSで亡くした子どもたち（AIDS孤児）の教室を訪問したときです。このような時にお目にかかったケニアの大学の教授の言葉をご披露したいと思います。アフリカにはこれまでたくさんの紛争がありました。干ばつや飢饉がありました。そして、そのためには食料や栄養、医療という、いわゆる人道援助が必要です。しかし、本当に子どもに必要なものは、そういう身体的なものではなくて、「心の栄養だ」というお言葉です。大変感動しました。この学校で、私が子どもたちと話していると、Doc, from where do you come? (どこから来たの) という声がかかりました。私は You guess (当ててごらん) と、ええ格好で言ったのですが、返事ががっかりしました。America? と言われたので、「違うよ」、Asiaと言ったのですが、なかなか日本の名前が出てこなくて、ちょっと情けない思いをしましたが、勉強するというので、生き生きした子どもたちの目を思い出すたびに、教育の力ということを痛感します。

これは私の大学です。私は教育の専門家ではありませんが、教育ということの重要性に関しては、恐らく教育のご専門の方々と同じように、あるいはそれ以上に、その重要性を認識しているのではないかと思います。本日、このような大変意義深いシンポジウムにお話の機会をいただきましたことをあらためて感謝申し上げます。アフリカの女性、アフリカの人々、アフリカの子どもたちの健康、そして発展を祈ってお話を終えさせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。